

第4回審議会意見等の分野別整理

1 基本構想の検討

要点	意見要旨
基本構想の 検討	長期計画は10年スパンで考えて、社会が構造的に大きく変わっていくことに対応する計画であるという認識が必要である。これからどういう時代認識になって、これから10年がどうなるのか議論をしなければいけない。
	これまでの20年を指して「失われた20年」と言われているが、第5次の長期計画を策定した頃というのは行政面で影響がなかったが、この10年間で経済が空洞化してきている。高齢化の流れも加速している。こういう時代がさらに加速して行政や市民生活に影響を与え、青梅市も逃れることはできない。
	「入りを量って出るを制する」ということが言われるが、長期計画は希望的観点で「出る」だけが記載されている。個別計画を足せば長期計画になるということは、根本的に違うと思う。
	国は借金を増やして国債を発行してなんとか生活を保っていた10年である。青梅市はどうかといえば、青梅市も同様である。今後、市の固有の税金といえば固定資産税や住民税だが、これらがたがたになる10年になっていくと思う。国に期待することはできない。
	今後の10年を考えたとき、産業の活性化、働く人すなわち税金を納められる人や若い人を増やす政策を長期計画の大半に盛り込んで考えていかないと絵に描いた餅になる。
	時代認識として地方の時代と言われているが、これは地方生き残りの時代だと思う。活性化に成功したところが残り、他が廃れていく。若い人が住み、担税力のある人をいかに増やすか。それと産業を活性化するかということ。「自立都市青梅」をテーマにしたらいいいのではないか。
	国はここ10年間「選択と集中」ということで市の姿勢次第で援助の大小を決めるという方針であったが、国土交通省の方針に変化が見られ、国の所管である道路や河川などを各自治体が自由に活用して自分たちで収入を得て市の財源としてよいという考えが出始めた。
	「ひとりは皆のために、皆はひとりのために」というのが、世の中が動いていく大前提である。ギリシアや夕張は他人事ではないという認識を市の職員含めて全員が踏まえて引き締めて長期計画を策定していかなければいけない。
	これまで施設づくりではなく仕組みづくりについて議論してきたことを考えると「まちづくり」というと道路や施設整備のイメージを見てしまい違和感を覚えるが、仕組みということを考えると「まちの在り方」ということなのではないか。

	「将来の都市の視点」であるとか「将来の都市の姿」という方がいいのかも しれない。ソフトとハードがバランスよく、今あるものをうまく再活用して使っ ていくということがとても重要。高度成長時代は 8 割がハードで、徐々に拮 抗してきているが意識はハードにあるので、そろそろソフトが 7 割を占めると いう切り替え時なのではないか。
	国や都、国際的なことも含めて、市としてどこまで掘り下げて分析し 10 年 後を見通せるかという点で難しいので、国の計画なども見ながら市としての危 機意識が盛り込まれるような形で表現するしかないかなと思う。長期計画 は、限られた情報の中で 10 年後を見ながら、市としての方向性を市民に 伝えていくという役割もあると思う。
	時代認識を受けての市のこれからの課題をどう克服していくのかというところ で、総合計画であるから仕方がないのだが膨大過ぎる。市民が手にとっ て見ることはまずなく、理解もしにくい。また、網羅的で一般的になってしまう。 行政として予算化の問題もあり計画に記載したいということで益々膨大 になる。長期計画は、ややコンパクトなものにして重点的に何をするのかと いうところに厚みを置いて作ってはどうか。個々の事業については個別計 画に委ねるということもできる。
	青梅市は、この 10 年でジリ貧がドカ貧になるであろうという時代に生き残っ ていくために、産業や定住ということは何か長期計画に載せていく必要が ある。
	審議会という場で活発な議論ができるが、それをどのように計画に反映さ せていくのかということを考えると本編とは別に委員の 10 年のビジョンを書 くというのはどうか。長期計画は市が描くものだから各部局への目配りであ るとか、それ以前に市内の地区・地域への目配りもあるので総花的に成ら ざるを得ない。どこかの部分だけを強調して描いて他は描かないというわ けにはいかない。
	できないものを明るい将来像として計画をたてても仕方がないということは 承知しているが、10 年先に今よりも青梅が基本理念にあるような街に向か っていきような明るい将来像を計画してたてるものではないかと思う。金が ないのにこんなことができるのかと思うこともあるが、ハードの面も含んだ全 てがこれからも青梅に住んでいきたい、青梅に住んでよかったという方向 の計画をたてる会議ではないのか。
	得てしてこういった会議は、色々な意見を聴いてきれいな報告書を作るだ けが目的となりがちだが、そうではなく報告書をたたき台に皆が元気になる ようにしていこうとするものとして議論になるようなものがないと思う。

	こういう時代だけど「頑張ってやっていこう」と、計画書を見てこれから厳しいけど青梅は他とは違ってこうやっていくんだというものであるべき。
	日本を動かしているのはたったひとりの人間の集まりであって、そういう基本的な力をひとりひとりがつけていかないと日本や、当然青梅市も良くはならない。「ひとり皆のために、皆はひとりのために」といったものを全ての基本の中に置いてもらいたい。
	商業者も農家もなんでもそうだが、自分が生きていくために何をしたらいいのか、正しい情報をキャッチしてどうやって生きていったらいいのかということ、青梅市が大きなところから方向性を出すのが長期計画なのではないか。
	子どもを3人生み育てるために、変わらない収入の中で市側が提供できるものもあるがそれを実現するためにはどうするかということが個別の計画に入ってくるというのが順序だと思う。
	今までの考えでは荒唐無稽であったものでも、これからはそれをやらなければいけない時代になっているので知恵を使わないといけない。
各個別項目に関連して	「5 時代潮流」には具体的な形で危機意識として将来が必ずしも明るいものではない可能性があることも含めて現状を捉えて記述する。
	「6 市の特性」を見ると、いいところだけが記載されているが、市が持っているいい部分と同時に克服しなければいけないところがあって、地理的な条件を含めて色々な制約があるのでそういうものも書き込みながらその中でどういう課題があってどうしていくのかという形で書いてほしい。
	わかりやすさという意味では10くらいの柱でいいのではと思う。
	生涯学習という言葉が入っていないがどこに組み込むかは考えていく必要がある。
	全体を通しては、まちづくりの基本方向の柱立てが、これまでの5つから10になったことで、方向性や課題がわかりやすくなった。震災後の「安全・安心な暮らし」「物質的・精神的に保障」という具体的な基本理念を打ち出したことで、今後10年間の厳しい経済情勢の中でいかに市民の生活を保障するかという方向性が出ていると考える。
	「枠組み」が本当にこれでいいのか。
	こういった時代に、第6次が第5次の延長でいいのかどうか。
	基本理念の表現や項目がこれでよいのか。「物質的・精神的に保障されるまち」に違和感はないのか。
	視点がこの5つでいいのか。「地域資源」というのは表現のレベルが違うので地域資源の「活用」や「見直し」という言葉が必要。「絆」という言葉で10年や20年の先々を考えているのか、安直ではないか。

	柱が 10 になってわかりやすくなったが、今は基本方向というよりは「領域」を 10 たてたということだと思うが、これに特化してやるというところまでいっているのか。
	「子ども」というのが独立しているのはいいが、向こう 10 年間地域の本当の担い手の人たち中堅世代やシニア世代、さらに取り込んでいきたい働く世代や若い世代の人に対する分野がどこにも入っていない。
	高齢者が「福祉」に入っているが、福祉の対象ではない高齢者がたくさんいて、中堅世代やシニア世代に暮らしやすく頑張ってもらえる地域を目指すかということが今後の課題なのではないか。
	時代潮流や市の特性で、それぞれ挙げてあるのであれば課題に関しては課題を克服する方向、いい特性であればそこを伸ばす方向が基本方向に書き込まれていったほうがわかりやすい。まちづくりの課題と市民の期待についてうまく流れていない。
	市の特性の「豊富な観光を活かした観光産業」や視点の「多様な地域資源を活かし」とあるが、従来考えていたような観光資源の捉え方ではだめかもしれないと資料 6 で表しているのではないか。他市のダイナミックで外に目を向けた考え方を見ると、従来の考え方ではこれからの時代を乗り切っていけない。
	「生活」と聞くと暮らしやすさや買い物の問題、地域の助け合いの問題が出てくるのかと思ったが、基本的には震災対応が非常に大きな内容を占めているようであるので、この 10 の柱でこういう表現でいいのか。
	「文化」という言葉から出てくる内容がこの施策分野にある内容でいいのか。地域の生活文化のような話が書き込まれた方がいい。
	「健康」では、皆が元気で健康な街を目指すことは必要だが、永遠に元気で健康ということはあるえないという見方。
	「雇用・産業」の観光の文意ではこれからの観光ニーズに応じて観光都市として生きていこうとするならばまた違った見方が必要である。
	長期計画の中で、目標のようなものが欠落しているのではないか。これから先 10 年をどうしていくのかという市民に対するある種宣言のようなものが必要なのではないか。
	3～5 つ多くても 10 くらいの宣言のようなもの、目標のようなものが設定されてもいいのでは。夢のある目標であり、知恵を使い皆が走り回ればなんとか実現できるような目標を立てることが必要だと感じている。他市とは違って青梅市がそれを先導するような勢いでそこに向かっていくという時代でもいいのではないか。

2 分野別事項

(1) 自然・安全安心・生活・環境

要点	意見要旨
高齢化社会への対応	青梅市の高齢化率が高いこと、施設数が多いこともあって、高齢者に関する議論は多くなされており、買い物が難しくなっている高齢者など、要介護の手前の高齢者に対して、買い物や介護予防の必要性が指摘されている。

(2) 教育・文化・スポーツ・交流

要点	意見要旨
美術館の活性化策	美術館の館長というのは営業マン化しているところがあるのできており様々な企画をしている。市内の美術館は減少傾向にあるというのは、考えていかなければいけない。
青梅の教育に必要なこと	市外の方から青梅の子どもの学力は低いと言われたことがあるが、学校の先生はいい学習をして、いい環境で育って良かったと思っている。しかし、都心の成績評価と比べると青梅の成績評価が低いという現実を考えると魅力があって若い人たちが青梅に来るならば、学力の点のところもきちんと保障できるような環境でありたいと思う。
	学力差については、高校入試の時に困っている。知っている情報では上位校へ行ける子はきちんと塾に行けており学習もできているが、行く高校がなかなか見つからない子は塾にも行けず、不登校であるなどの状況があり学校選びに苦労している。都立高校の学費が無償となり親は喜んでいるが、進路指導については先生も苦労しているのではないかと。子どもたちは、いい子がたくさんいて学力だけで人間を評価するような子たちはあまりいない。人間の心の育ちとしてはいいと思うが現実問題、入試となると親は心配をしている。
	学校では、耐震問題や冷房の問題で、支出をしていかなければいけない部分があり、学校運営のための経費はどんな時代であっても必要な部分は確保していかなければならない。
	青梅の子どもたちが将来青梅にいて良かったとか、青梅で学んだことを社会に出た時に活かせるような施策は、「不易と流行」という中での基本のところだけを固めていくような教育だけでは、特色があってそれを自分の力にして活躍するような場というのは生まれてこないのではないかとと思う。
	都内のほとんどの地区の学校を現在も回って見てきているが、学力の問題については、競争意欲であるとか切磋琢磨しながら伸びていこうという意欲に関しては穏やかすぎるだけに物足りないと感じる。

	先生の指導については、大変良質な指導をしているとは言える。特に小学校では丁寧に行っているし、どの学校を取り上げてもしっかりとしている。それが受験のための学力として捉えた時に果たして十分であるかという心もとない。
	受験学力がつけば学校の評価が高くなるのかというところは別の議論であって、青梅の教育は地域として地域に生きている子どもたちが身につけるべき学力をきちんとつけていくということと、社会に出た時に自分の個性や能力の中で伸ばせるものなのかということを指導していくような教育でないといけないと思う。
	これからの流れとして、幼児教育や家庭教育、学校教育、生涯学習というのは子どもの成長過程を追いながらどう教育が関わっていくか見ていくという考えは重要。
	子どもの教育については、学歴が幸せにつながっている時代ではなくなっており、青梅の子どもたちには「生きる力」を身につけてもらいたい。入ってきた情報をきちんと分析して、それがどういうものであるかと分析できる力があれば幸せな人生を過ごせるのでないか。
	「生きる力」が無くてもどこかの分野ですごくできる人間というのもある訳だから、そういう人間が出てくることも重要だと思う。

(3) 福祉・子ども・健康・社会保障

要点	意見要旨
安心して子育てできる環境	それぞれの各部署で子育てできてよかったという環境づくりが整っているというPRが外部にできていない。市外の方から「子どもに関する施設がないんだって?」と言われると、そういうところに住みたいと来るものなのか疑問である。
	若い人を呼ぶためには、子育てできる安心な環境、学力も保障できるなど青梅市に突出したものがあれば都心への通勤圏で、自然環境はすばらしく、人情味もあって、まだまだ高齢者とのコミュニケーションもとれる、都心に比べて地価も安いというところで、工場地帯に空き地があるのであれば若い人に住んでもらえる宅地化を考えてみるという方向を見出すことも必要ではないか。
ひとり親家庭への支援	民生委員の視点から、青梅にはひとり親家庭が多い。ひとり親家庭に手厚く面倒見のいい青梅市ということや、ひとり親家庭ネットワークみたいなものがあってひとり親家庭同士が助け合いながら暮らしているというアパートもある。社会福祉の面で他市より手厚いという青梅市だからなのは。

高齢者との交流	青梅市では、特別養護老人ホームや老人病院がいくつかあり、その多くがややアクセスの悪い場所にあることもあり、施設に入所するとなかなか他の人と交流することができない現状である。そのため、市民の方と交流することも求められていくと思う。
共生の環境整備	これまでの会議では、比較的若い障害者の方についてはあまり議論されてこなかったように思う。このことは「生活」「参画・協働」も含め、ハンディのある人もない人もともに暮らしやすい環境が整備される必要がある。

(4) 産業・都市基盤・観光・雇用

要点	意見要旨
産業の振興	商工業の活性化によって居住人口を増やし、地価の下落を止め、固定資産税を確保するということが大事だと思う。 10年位の人口や税収といった分析はできるが、どう克服するかということについては自治体レベルでは難しいと思う。他の自治体で、不景気でも田舎でも新しい産業を興して元気な自治体もあるが、行政の頑張りというよりは民間なのではないか。 民間が頑張れるステージがほしい。 ベンチャーを生む気風だとか施策をとるところがなければ、都心に近い所に行ってしまうのではないか。しかしICTの時代になるとそうではなくなるかもしれない、都心まで多少時間はかかるけど子育てをものすごくしやすいという施策があれば共働きでも青梅に住むかもしれないし、在宅勤務もできる時代になる。 情報の流通を活性化させるということは盛り込むべき。
利便性の向上	新宿まで行くのに60分を割るようなことになると青梅を住まいとして都心に出ていこうという人が増え、担税力のある方が増えるのではないか。
観光産業の活性化	かんぽの宿について、聞いたところでは年間で36,000人から40,000人の利用があって、都心の方が平日に連泊をして週末には帰っていくという実態があるようで、こういったことを産業として取り込めないか。 青梅大祭はとても立派なものなのに、PRが不足している。 定住人口が減っているという現状に、交流人口を増やして街を活性化するという観点から言うと観光客が様々な施設で減っている。青梅の観光政策としては悪い傾向である。 青梅を観光地として観光客を呼ぼうとするが、このことによる経済効果がどの程度あるものなのか。

(5) 協働・コミュニティ・行政運営

要点	意見要旨
協働の推進	「参画・協働」という視点を明確にしたことで、市民同士の「つながり」を作っていくためのステップになるのではないかと。青梅市は人のつながりが残っているため、それを行政の支援を得てさらに強めていくシステムづくりが期待できる。 市民活動、街を活性化するためには、行政も元気でなければいけないし、市民活動も元気でないといけないと思う。そこを結び付けるのが協働である。市民の夢や思いや、街の活性化への望みがあって、それは生活の中からでてきたものだから具体化している。しかし、人手、システム、資金が足りないというところを行政と市民とが手をつなぎ「協働マニュアル」を使って立ち位置を同じにして話を進めて各地域の産業や文化を向上させて、地域が盛り上がっていけば市民活動の広がりができるのではないかと。 市に財源がない事は十分承知しているが、市民活動の中でこの街を良くしようということを、やる気のある行政と協働ができればそこから活性化ができるのではないかと。
まちづくりの姿勢と厳しい財政	これから先の 10 年を考えた時には今までどおりのことをやっていったのでは、税収や社会情勢を考えてみても青梅市は間違えなく先細りである。その中で青梅市が強くなっていくためには、青梅市が新しい産業を作っていく必要が必ず出てくる。その時市の方ではできないというのでは困る。新しい産業を作っていくという企業が出てきたときに、役所の方でそれを応援しようという意識を持っていれば大きく構造が変わっていくことだと思う。 企画が出てきたものを応援する街であるべき。 現実を見ると市の借金や歳出額が増えている中で、目標を立てても必ず関わってくるのはお金の問題である。そのお金をどうやって捻出したらいいのか。削減策がなかなか出てこない。そういった具体的なものも検討するべき。 削減の方法として競艇の問題があると思う。収益事業が重荷になっているとすればバッサリと切るようなことも検討すべきではないかと。そうでないと益々負担が増えてしまうのではないかと。
広域的な連携の重要性	青梅線の快速の問題では、そこを通るそれぞれの市との協調と連携がなければいけないし、青梅の先には奥多摩がある。西多摩行政圏というのがあるが、必ずしも実際に様々な事業で連携・協力するということが見られない。これからの時代にはICTの活用も含めて連携が必要なのではないかと。この地域全体がよくなると、青梅だけがひとり勝ちということはない。市民間や行政間の連携も視点として盛り込んで欲しい。